
魔導新世紀リリカルなのは GEARS OF DESTINY

可能性の出来損ない

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔導新世紀リリカルなのは G E A R S O F D E S T I N Y

【Nコード】

N1677BA

【作者名】

可能性の出来損ない

【あらすじ】

砕けえぬ闇事件それにより、エルトリアに向かったスウェンたち。

そこで世界の死蝕の原因を究明するうちに世界と世界の間を知ることになる。

作者はマテマテフェイと同じです

第1話 世界と世界

砕け得ぬ闇事件終了後、僕はエルトリアに向かう事を決心した。このまま管理局で働くのも悪くは無いが、僕の存在はロストロギアと同等の物なので、管理局にとっては厄介な存在そのものだった。クロノやリンディ提督と言った一部の人は僕を危険人物として認識せず、今を生きる命と扱うが、いずれ管理局で働けば、迷惑をかける事になるので僕は自分の独断でエルトリアに行く。

「本当にいいんですか？」

「うん。僕の事も消して欲しい。無理にとは言わないけど」

僕の言葉にアミタは複雑な顔をする。だが僕が居ないと思えた方がなのは達にとつても幸せと思う為にアミタは了解してくれた。未来から来たヴィヴィオやアインハルト、トーマにリリイと言った者達の生きる運命を改変する事は、承知の上だった。

「無理をしないでいいのよ…強制と言う訳じゃ無いし…」

「僕は本来、生まれる筈の無い者です。これで彼女達の未来は元に戻りますよ」

「スウエン、私達と行けば、もう二度と会えませんよ？」

「承知の上だよ。もう後ろは振り向かない」

僕は最後の決心をして、エルトリアに向かう。本当は約束を守りたかった。彼女達とと共に生きたかった。だが僕は別れを決断した。未練が無いと言えは嘘になる。それでも僕は存在しない者これ以上迷惑をかける前に消えるのが得策だと考えて僕は何も言わずに去って行く。

「世界が変わっても、同じ時を生きているのは同じ事ですよ」

「シュテル、ありがとう…」

「それに私は約束を果たさねばなりません」

「なのはとの対決だね？」

僕の問いにシュテルは頷く。シュテルの言葉を聞いた僕も、もう一

度いや別れても会えると感じてしまう。未来組を元の世界に置いた後、僕らはアマタとキリエの故郷エルトリアに辿り着く。

「僕の予想通りの世界だ……!!」

「レヴィ、遊びに来た訳では無いぞ。その辺りをちゃんと意識しろ」

「王……レヴィなら、もう居ませんよ」

スプライトフォームで飛んで行くレヴィにデИАーチエは怒り顔になるが、ユーリに止められレヴィの追跡を断念する。僕とシュテルは、アマタに遺跡へと案内され遺跡の言葉を解読する。

「流石は聖魔導の力を継ぐ者ですね」

「つまりは、死蝕の原因が、あると言っ訳ですか？」

「ユーリが関係しているのは間違い無いけどユーリは毒から守るワケチンの様な物らしいよ」

遺跡の意味を調べる内に、僕は一つの言葉を見つける。聖魔導と悪魔……実際には悪魔では無くウォーと書かれているが、ウォーが示す意味が分からなかった。

(ウォーに……時空管理局……もしかして、この世界は犠牲なのか?)

「どうかしましたか？」

「何でも無いよ。他に遺跡はあるの？」

自分が考える最悪な状況は話さず、今はエルトリアと言っ世界の事を知る事を最優先にする。そして一週間……僕はシュテルと共にウォーや様々な事を調べる。その過程で過去に死蝕によって滅んだ世界の情報を見つけ対抗策を試す。最初の頃は効果など無いに等しいが、徐々に効果が出始め毒沼となる場所や少しずつ緑の無くなる世界が再生を始める。

「スウエン、あなたは気づいているんですね？」

「何の事……」

「この世界が死蝕と言っ現象を受けた理由です」

「この事実を信じたく無い」

僕は自分が考える事をシュテルに話す。シュテルも同じ事を考えていた為に、僕とシュテルはこの世界と時空管理局そして失われし世

界アルハザードの関係を調べる。すると、ミッドチルダ、アルハザード、エルトリアを繋ぐ世界が一つだけ存在する事を知る。

「エルガスト……」

この世界は3つの世界の縮小と言っても過言では無い世界で、エルトリアと同じく死蝕や謎の感染症により、滅んでいた。ベルカ式ともミッド式とも合わない独自の魔法理論が存在する世界。アルハザードと同じ様に禁忌の力が多数存在する事から僕とシュテルの意見は合う。

「エルガスト：今も情報は残るかな？」

「目星は付いてますよ。スウエン」

シュテルの言葉が指す意味：それは、3つの世界に存在する事実を照らし合わせる事だった。エルトリアの事実は得られるが、残る2つの世界の情報は現状の状況では得られないに等しかった。だが、僕とシュテルはエルトリアで起きている現象に不信感を覚える。今までは、死蝕は止まる所か世界を少しずつ殺していたのに、今のエルトリアは驚異的な速度で再生を始めて、僕とシュテルが予測する時間より遥かに早い段階で毒沼は消え去り、緑も戻っていた。

「後、10年以上はかかる筈だよね？」

「ええ、我々が行った事は応急処置に過ぎませんからね」

「大変です。エルトリアが崩壊するらしいです……！」

突然来たアマタの言葉に僕たちは、ユーリの元に来る。ユーリとデイチエも異常な光景に危険を感じたらしく、独断で調査を進めていた。僕とシュテルはデイチエの言葉を聞き解読の出来ない部分を解読する。すると、世界の死蝕が起きた原因が判明し今、エルトリアに起きている事も説明が出来た。

「つまりは、あなたの存在がトリガーとなった訳ですね」

「うん：この世界はエルガストと同じ運命を辿る」

僕とシュテル達は、逃げる術も無く自分の運命を受け入れるが、世界の崩壊は止まって、空の色も快晴となる。僕とシュテルは驚きながらも、感じた事も無い気配を確かに感じる。ウォーと言う者の気

配なのか、それとも別の何かなのは確かめる術も無いが、人と言
う存在で無い事は確かだった。

「驚いたな…まさか、君の様な存在が居るとは…」

「僕はスウエン・レイク。あなたは？」

「私はオーヴィン。人はそう呼ぶ」

オーヴィンと名乗る者は、こちらに敵対する意思は無く、僕やアミ
タ、シュテルを見る。こちらのメンバーを確認すると、オーヴィン
は世界の崩壊について話す。話を聞く僕たちは警戒を解かず、真実
とも嘘とも取れる話を聞いて行く。

「君達は、エルガストを目指す気があるのか？」

「行かねばなりません。この世界といや、次元世界の為に」

「生きて帰る事は、不可能だぞ？」

「承知の上です。それでも止まる訳には行きません」

こちらの覚悟を感じたオーヴィンは何も言わず、次元を切り裂く。
異常な気配を感じる歪みが現れ、僕たちは湯有無を言わず吸い込ま
れる。次元の歪みが閉じると、僕たちは見た事も無い場所で目を覚
ます。建物や見える大地からして、エルトリアや海鳴とは違い、魔
力そのものを感じる事が出来た。

「此処が、エルガスト…」

「私達の予測を超える世界ですね」

魔力と言う物が、常に体を覆う気配を感じる世界に僕は違和感を覚
える。シュテルやアミタ達も違和感を感じながら、人の気配を探す。
だが人の気配を感じる事は無かった。何者かに襲われたにしては、
綺麗な町に僕たちは戸惑う。ウオーと言う者が存在する事は知って
いるが、ウオーと言う存在が、どの様な姿をしているのかは知らな
かった。だからこそ下手な探索は出来ない状態だった。

「人は見当たりませんよ…」

「ウオーと言う者が、襲ったにしても綺麗過ぎるしね」

「情報の少ない我々では、ウオーを探す事自体不可能だな」

「……待て下さい。何かが来ます」

ユーリの言葉に全員、武装を展開する。だが僕らの予想を超える物が僕らの前に現れた。巨大な兵器、ロボットとでも言うべき物が僕らの前に落ちる。そしてそれを追うようにウォーと思わしき者達が現れる。

「此処は、あのロボットを回収するべきですね」

「ならば行くぞ…エクスカリバー!!」

「シユート・エンド!!」

「真・ルシフェリオン・ブレイカー」

3人の強烈技が炸裂するが、驚く事にウォーはダメージを受けない。と言うより、魔力を取り込む能力が上昇した。先手を打った筈が、一気にピンチとなる僕らにウォーはターゲットを変える。レヴィやキリエも迎撃に参加するが、ダメージは与えられず、ウォーはユーリを狙う。

「ユーリに手出しはさせない!!」

聖魔導の力を開放し、ユーリに近づくウォーを止める。するとウォーは何が起きたのか黒い液体へと変わって消える。聖魔導の力に弱い事を確認した俺は、他のウォーも同様に消し去り何とか生き延びる事に成功した。

「それにしても…この兵器、何だろうね？」

「プロテクト解除…ハッチ解放」

シユテルがロボットのハッチを開けるが、無人でシステムも起動していた。エルガストの技術を利用してはいる為にシユテルやレヴィ達には解読不能な部分が多く、情報も入手は出来なかった。シユテル達はシステムのカットも分からない為にシステムのカットもせず出てくる。一応、僕も入ると強制的にハッチが閉まって画面には謎の文字が出てくる。

「スウエン、平気ですか？」

「うん、大丈夫だけど…起動原因は？」

「多分、あなたの生体データがキーとなったのです」

「僕の生体データって…うわっ」

勝手に自動防衛状態に代わって、僕を乗せたままウォーの追撃部隊を殲滅する。魔法とも質量兵器とも取れる謎の兵器の威力は魔法では殺せないウォーを一瞬で殺す程の能力だった。シュテルは、エルガストに伝わる独自の魔法理論の中に【魔導機】と言われる決戦兵器がある事を思い出す。乗り手は限られ、全部で10機しか存在せぬ世界の脅威に対抗する為の兵器。その事を僕に話すと魔導機自体がシュテルの言葉を理解したかのように僕の脳に直接、ウォーの事やエルガストの事を教える。

「えっ…ウォーを殲滅しても、答えは出ない？」

『エルトリアとミッドチルダ。二つの世界の始まりを探して下さい』
「どう言う事、シュナイザー!!」

それ以外、何もしゃべる事は無い魔導機に僕は困惑しながらも、ハッチを開けて全員に僕が聞いた事を話す。流石に信じられないと言った表情だが、古代の遺産【魔導機】の事を知らない僕らに反論する事も出来ず、エルトリアとミッドチルダ二つの世界へ向かう。

「僕とレヴィ、シュテルがミッドチルダに行く」

「デИАーチエとキリエ、アマタ、私がエルトリアでいいんですか」
「でも…戻れるんでしょうか？」

「戻る事は可能だよ。でも僕らはミッドチルダを探す」

エルトリアへのルートは確保できているが、肝心のミッドチルダへのルートは無い為にアマタ達を見送った後、僕とレヴィ、シュテルはエルガストを旅する。相変わらず、人の気配は感じないがウォーの気配だけは感じていた為に僕らは迂回しながら、魔導機に登録されていた王国【クルセイド】を目指した。その頃、エルトリアに帰った4人は自分達がエルガストに転移する前の事を思い出す。あの時には、緑の大地が再生していたが、目の前に広がる光景は完全に死蝕したエルトリアそのものだった。

「どうなってるの…」

「ユーリ、何か分かるのか？」

「嫌な気配を感じる。憎しみを持つ者」

ユーリの言葉にディアーチエは精神を集中させて、ユーリを困らせる権化を見つける。だが、こちらの攻撃は一切受け付けずディアーチエは一撃で倒される。

「あなたは一体……」

「お前に名乗る意味は無い。ウォーとでも覚えておけよ」

ディアーチエを倒したウォーは何事も無かったかの様に転移する。

死蝕により死んだ世界エルトリア。アマタ達は、シュテル達とは別に行動を開始する。

第1話 世界と世界（後書き）

エルガスト・・・誰も知らない世界が意味する事とは・・・

次回 第2話 変わる未来

ミッドチルダへと辿り着くスウェンたちだが、彼らがたどり着いた
場所は・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1677ba/>

魔導新世紀リリカルなのは GEARS OF DESTINY

2012年1月4日08時49分発行